
約束と滅びの予言

クフィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束と滅びの予言

【Nコード】

N9267L

【作者名】

クファイ

【あらすじ】

魔女は、笑う。

『あれは、“想い”ではない、“呪い”なのだ。』

いつが始まりだったろうか。
人々は、言う。

力を求めて『異世界』から『異世界の者』 “召喚獣” を呼ぶ存在を“召喚師”と。

“召喚獣”を呼び、文明を伸ばしてきた世界“イクディアス”。“召喚獣”と呼ばれる者たちは、巨大な力を持ち人々に恐れられ、迫害される。そして、彼らは“召喚師”と“契約”を結ばれる。元の世界には戻れず、この世界に縛り付けられる“呪い”を。

人里離れた森の奥深くに住む母娘がいた。

“召喚獣”の1人、サラに育てられた娘、ルナ。

彼女は最近夢を見ていた。懐かしい夢を。

だが、その日だけは違った。

ほんの些細な出来事が、世界を真実を知るきっかけになるとは、誰も気づきはしなかった。

夢の始まり（前書き）

初めてなので、文章がおかしいかもしれません。
誤字脱字があれば、教えて下さると嬉しい限りです。

夢の始まり

最近、よく夢を見る。

ぼんやりしていてあまり見えないけど、とても懐かしい気持ちになる感じの夢だ。

夢の道筋は、大体いつも同じ。

私は、ただその場に立っていて目の前に見える2人分の影に笑いかけている。その人たちも笑って、私を呼びかける、とそんな夢だ。

たったそれだけなんだけど、私の心は凄く満たされるのだ。

でも、今日は違った。

いつもと同じ空間にいた。だけど、いつも見える2人の姿がない。代わりに帽子を被った人が立っている。帽子は、物語に出てくる魔女が被っている三角帽子の形をしている。体格を見てもその小柄のものは、女性だろう。

だとしたら、この人は魔女なんだろうか？

『正解』

『っ！』

喋らないと思っていた。でも、声の高さで間違いなく女性だと分かった。クスクスと笑っているのが分かる。私が、困惑しているのが面白いが、元々からかうことが好きなのか、多分後者だと思うけど。

『へえ、私の性格は覚えてるのね。それともおなじみの力のせいかしらっ。』

『っ！……っ！？』

一瞬彼女が言ったことが、よく分からなかった。私は彼女を知っているかのような口調だ。見覚えもない、増してや姿も分からない。不信に思った私は、問いただそうと思った。

だけど、声が出なかった。口は開くことは出来たけど、魚が餌を食べるときみたいにパクパクするだけだ。

『ああ、多分喋れないと思うわよ。ここは、あなたの“中”だけど、支配してるのは私だから。』

彼女は普通に話してきたけど、それって私にとっては聞き流せない内容だと思うんだけど。私の“中”なのに何故彼女は、支配してると言っただろう。

『あら、やっぱり全然覚ええないのね。悲しいわ。』

『……』

『別に気にしてないわ。だって、それが“当たり前”なんだから。』

笑っている、ように思える声色は、何だか哀れみも含んでいるように思えた。

私がじっとしていると、彼女が近付いてきた。

私の直ぐ手前で彼女は止まった。直ぐ近くにいるのにやっぱり私には、ただのぼんやりとした影にしか見えなかった。

少しの間、沈黙した。

私は喋れないから、どうしようもない。彼女が一方的に話しかけるのを待つしかないのだが、この空気が何だか嫌だった。

しばらく経って、彼女は口を開いた。

『…悲しい娘。』

『“運命”に操られ、未来を見出すことができない。』

『裏切られ、傷つけられ、憎まれても、』

『そこに居続け、待ち続けているのね。“かの者”たちを。』

心が、痛かった。

彼女の言葉には、沢山の重みがあった。身に覚えはない、感情が身体の中から溢れているようだった。知らないはずなのに。

いや、私は、

…私は、知っている？

『忠告してあげるわ。あなたが、毎晩見ている夢についてよ。』

『穏やかに見えるものだけど、実際は違うわ。あなたの心を写し出したもの。』

『あれは、“想い”ではない、“呪い”だ。』

それを、聞いた瞬間

私の足元は、崩れた。

ざわめき（前書き）

初めてなので、文章がおかしいかもしれません。
誤字脱字があれば、教えて下さると嬉しい限りです。

ざわめき

月によって不気味に照らされた森の中の話。
森の最初の、物語。

「いたかつ!？」

「いや、…だかあの怪我だ。遠くには、そう行けやしない。」

「油断するな!相手は、腐っても“召喚獣”だ!！」

月の光が、夜を美しく照らしている。

しかし、森はざわめいている。それは、珍しい客人を招いているせいかもしれない。

数人の男たちは、夜になり不気味に変わり果ててしまった森をさまよい歩いている。ある、一つの目的の為に。

「
.....」

数人の男たちからそう離れていない所に、少年が息を潜めていた。男たちの様子を窺っている。

少年の肩や足には、切り傷が見られた。それは真新しく、月の光はその赤を静かにてらしていた。

「（……まで、……か。）」

少年は、今の状況を思った。
助からない、と。

こちらは1人で、男たちは数人。仮に隙をつくり、逃げたしたとしても、男たちの誰かに矢によって射抜かれるだろう、と。

少年は、木々の隙間から見える月をみた。不気味な月だった。だが、少し暖かく満たしてくれるような月だ。

「勘弁してくれよ。……俺は、これ以上進みたくないぜ。」

「おい、口を慎め。“森”に嫌われるぞ。」

「まあ、一応、加護を持っているから大丈夫なハズだがな。」

“この”世界の人間は、言う。この巨大な森を『樹海』と。

この森は、『帝国』という“この”世界で、一番大きい国の周辺にある。

見直に感じるはずの森には、人が恐れをなす要因があった。

森は、招からざる客人には容赦はしない。

認めない客人は、方角を狂わされてしまうらしい。らしい、と言うのは少年もただ、仲間から聞いた話でしかないからだ。

入った最初は、方角通りに進んでいけるのだ。だが、歩いているうちに森は客人を見つけている。

招くべき客なのか、と。

森は、意志を持ち、判断する。そして、有害で危険だと感じた客人に囁くらしい。

『スティア』と、

『ステイア』は、“この”世界の古い言葉で、『罪』という意味だ。何故囁くのかは分らない。だが、一つだけ言える。

囁きを聞いてしまった者は、終わりだ。二度と森の外には出れなくなる。何ども何ども同じ場所を歩いているようになるのだ、と。そうなって帰れた者はいないので、本当のことを分らないらしいが。

誰一人、帰ったことがないのに人々が何故、このことを知っているのか。

安心に歩ける方法もある、ということだ。

“加護”と呼ばれる物を持っていればの話だが。

だが、“加護”を持っている人間も、森が招からざる客人だと判断されると、囁くらしい。

最初の話は、その状態になった者たちが、人々に語った話だ。

“加護”は帝国の軍人しか、持っていない。
何で造られているかは、分からない。ただ、
貴重な物らしい。という
ことだけだ。

ここまで思い出して、気付いた。
追いかけている男たちは、それを持っていた。

つまり、

奴らは、帝国の軍人だ、と。

「（っ……！気づくのが、遅すぎた。格好からみて、ただの“ハンター”だと思ってたのにな…）」

軍人なら、悪すぎる。

何ていう連中たちにバレたんだ。

“召喚獣”だと。

少年は、笑って思った。

今日は、本当に運が悪い、と。

「見つけたぞ！！」

「っ……ちっ」

「くそ、ちょこまかとっ……追え！！」

少年は走った、ざらめき続ける森の中を。男たちも少年を追った。

その中の1人が銃を取り出した。

少年は月の光に照らされて黒く光ったそれを見逃さなかった。

少年が体制を立て直そうとしたときだった。

ドオオン

「……………なっ!」

銃声が鳴り響いた。

しかし、同時に少年の身体も傾いた。銃弾は、少年の肩を掠めただけだった。

少年の足元は、暗闇だった。

そう、崖だったのだ。

少年は、肩に僅かの痛みを感じ、顔を歪めた。

男たちは、驚愕していた。銃を持った男は一瞬呆然としていたが、我に返り銃を再び握ったが、遅かった。

少年は、崖の暗闇へと落ち、姿が見えなくなった。

「…死んだか？」

「いや、分かん。少なくとも、軽傷ではすまん。」

「ここは、“樹海”だ。死んだと考えるもいいだろう。とにかく、帝都へ帰るぞ。」

男たちは崖に背を向け、森の入り口へと歩いていった。

森は、笑っていた。

森の母娘（前書き）

初めてなので、文章がおかしいかもしれません。
誤字脱字があれば、教えて下さると嬉しい限りです。

森の母娘

森は、待っている。

その者たちが帰ってくることを。

森は、知っている。

運命は、変えられないことを。

森は、覚えている。

昔も同じだったことを。

森には、朝の独特の静寂があった。朝日は、木々の葉によって遮られ、大地まで満足には、照らしてくれない。

しかし、川は違った。朝日によって水面は光り、美しい朝の風景に思えた。

その川のほとりには、1つの影があった。

「んー…いつもと変わらない、朝だな。」

女性だった。腰まで伸ばされた金髪は、時折吹く風によつて舞い、金糸のように見えなくてもない。森には日があまり当たらないせいなのか、肌は白く、特に特徴的なのは、血のような紅い瞳だった。

女性は、バケツに水を汲み上げ、川のほとりから森に向かって歩き出した。少し森に入ると、すぐに木でできた古ぼけた家があった。女性は、ドアの取っ手を取り、ドアを開けた。

「ルナ、朝だよ！さっさと起きな！」

いつもの朝と変わらなかった。

「…うつ
…眠い。」

「何言ってるんだ、顔を洗ってさっさと起きな。」

「…そんなこと、分かってるよ。…サラ。」

女性 サラによってルナが被っていた布団は剥ぎ取られ、ルナは渋々といった感じで、目をこすりながら起き上がった。

ルナは、身だしなみを整えるため、鏡がある方へ向かった。

黒い髪はそんなには乱れていないが、まとまりがなかった。

「ほら、綺麗な髪なんだ。ちゃんとときな。」

「……ん。」

ルナは頷きながら、髪をとく櫛を動かしたが、まだ寝ぼけているようで、うまく櫛が通らない。

サラは、その様子に呆れて、ベツトを整えるのを止め、鏡の前に座っているルナに向かった。ルナの持つ櫛を取り、サラは髪をとかし

始めた。

サラは、この黒い髪が好きだ。闇のような魅力があり、美しさに引き込まれるような感じがする。
しかし、一番は“故郷”を思い出す。自分はまだ、“故郷”を忘れていないと思った。

「?……サラ、どうしたの?」

「あつ……いや、何でもない。」

考え事をしていたせいか、櫛が止まってしまっていた。ルナは、不思議に思ったのだと思う、大きな目で自分を見上げていた。
ルナの瞳は、満月のように光る金色だった。黒い髪に金色の瞳、ルナの名前の由来でもある。“ルナ”は、“この”世界の言葉で意味は“月”。

ずっと止まっていたので、流石のルナも眉を顰めて私を見ていたのが気付いた。

私は笑い、ごまかした。櫛を持つ手を動かし始めた。

「サラ、どうしたの？」

「いや、相変わらず綺麗だと思ってね。」

サラは、ただ悲しく笑っていた。

サラと一緒に朝食を取り、いつものように木の実を拾いに森の奥へ私は、向かった。

サラは、偶に髪をとかすと今朝のようになる。帰ることが出来ない“故郷”を思い出すらしい。私は小さい頃に理由を尋ねた。サラは、笑いながら言ったのを今でも覚えている。私と同じ色を持った知り合いがいるのだ、と耐えるように目を細めて言った。

小さい私は、その様子を敏感に感じた。
大切な人だったんだ、と。

サラは、捨て子の赤ん坊だった私を育ててくれた母だ。物心ついた頃には“召喚獣”だということを話してくれて、人里離れた森に住んでいても、“召喚獣”の扱われ方も知っている。

しかし、1つ分らないことがある。

サラは、やけに“召喚師”が使う術 『召喚術』について詳しく
った。

“召喚師”の元で助手でもしていたのか分からないけど、サラは実
際に“召喚術”を使って見せた。その時呼んだのは、無機物のもの
で、固くて四角い箱をしていた。

サラが言うには、“テレビ”という異世界では、情報知る上に使う
ものらしい。“テレビ”がある世界にいたのか、と聞いたが、答え
は否。サラの世界には、そんな便利なものはないらしい。

異世界について詳しいサラの話は、魅力的だった。“召喚獣”を呼
んで他の世界についても聞きたい、そう思った自分がいて、少し嫌
になってしまった。

サラが言うには、“召喚師”は知識と魔力があれば、簡単になれそ
うだ。しかし、“召喚術”は国家的にも強大な力だから、そんなに
使える人がいたら混乱を招く。

そこで、世界の大国の3つは、“召喚術”を使うことが出来る大き
な4つの一族を作り上げ、その一族しか“召喚術”についての知識
を与えたらしい。所謂、情報操作だ。

一族から“召喚術”の術を教えて貰えるのは、軍人や貴族ぐらいだ。
魔法学校があるらしいけど、一般人には、とても払えない学費らし
い。

そこまでしないと、知ることが出来ない“召喚術”を私はサラに教
えて貰っている。偶に行く街で、術に関する本を読み漁り、実戦し
ている。

しかしながら、サラはとてつもなくスパルタだった。

私が、“召喚術”についての本を理解していると分かった瞬間から、
教えられた。サラ曰わく、私には『才能』というのがあるらしい。

「それでも、あれのスバルタは勘弁して欲しいな。」

はあ、とため息をついた。
そして、いつもように木の実の場所に行くための橋を渡ろうとしたときだった。

「えっ……あれって……」

川の岸に何か黒いものが見えた。
遠くで見た感じでは、ただの塊にしか見えなかった。
しかし、所々赤いものがみえた。

私は、目を疑った。

そして間違いない、と思った。

それは血で塊は、『人』だということを

私は迷わずにその方へ走った。

その人に駆け寄り、傷の様子を見た。

ただ、転けたりしただけではこんな傷はできない。
つまり、この人は誰かに襲われたんだと分かった。

私は、持っていた布を水で濡らし、傷口にあてた。でも、ここでは
満足がいく治療が出来ない。

私は、サラを呼んでくることにした。この人を家に運ぶためだ。

「待つてて！すぐに助けるから！」

私は、ひたすらに走った。

召喚師と異界の王？（前書き）

初めてなので、文章がおかしいかもしれません。
誤字脱字があれば、教えて下さると嬉しい限りです。

召喚師と異界の王？

昔、昔

世界『イクディアス』は、異世界の『魔王』によって支配されていました。

人々は、魔王を恐れ、異世界の者たちによって虐げられていました。魔王は強い力を持っており、誰も魔王を倒そうと考える者はいませんでした。

しかし、その魔王に立ち向かった2人がいました。

1人は、のちに『世界一の召喚師』。

もう1人は、その召喚師と契約をした『異世界の王』でした。

しかし、2人は最初から契約をしていたというわけではありませんでした。

世界が魔王の侵攻が強くなり始めた頃でした。最初のうちは、人々も抵抗していました。

しかし、しだいに人々は恐怖に陥り、もはや成す術もなく、このまま世界が終わるのを静かに待つことしかなくなりました。

ある日のことでした。とある小さな村の少年が、『魔法使い』になりました。

しかし、この時代では魔法使いになることは命知らずの証でもありませんでした。

少年は言いました。

『みんなで立ち向かえば、魔王に勝てるはずだ！！』

人々は少年を『愚か者』だといいました。しだいに少年を避けました。

しかし少年は、諦めませんでした。

少年は来る日も来る日も探し続けました。魔王を倒す方法を

そしてついに少年は見つけました。

当時、禁忌だと言われた【召喚術】を使い、少年は『召喚師』となりました。

召喚師となった少年は、異世界の王に呼びかけました。

『王よ、どうか私に力をお貸してください！』

王は、はじめは何も答えませんでした。

しかし、召喚師は諦めずに呼びかけ続けていました。

王は、懲りない召喚師に向かって問いかけました。

『異界の人間よ、何故そこまでして力を望む？人はお前に何をしたい？お前を避け、虐げた奴らに何故、そこまでする？』

少年は、王に言いました。

『確かに人々は私を避けました。しかしだからといって、そのせいで私が人々を嫌う理由にはなりません。私は、人々の話ではなく、この世界が好きだから。守りたいから、力を貸して欲しいのです。』

王は、その答えに笑い声をあげました。大地を揺るがすような大声を上げて

『面白い、人間。“世界を愛している”、と。慈悲深い答えだ、気に入った。我は、そう答えた御主の姿を最後まで見たくなつたぞ。』

王は、異界から姿を見せ、少年の前に現れました。

『人間、汝の名を。問え。』

これが、『召喚師』と『異界の王』のはじまりでした。

目覚め（前書き）

誤字脱字のありましたら、教えてください。

目覚め

「一体、これはどういうこと何だい、ルナ？」

「えーっと……どこから説明したらいいのか……。」

川の岸に倒れていた少年をサラと一緒に何とか、家まで運んだのは良かったのだけれども。

サラは、ものすごく怒っている。厄介なものを運んできやがって、と口では言わないけど、目で語っている。

怖い、怖すぎる。後ろに薄ら鬼が立っているのが、見えなくもないような気がしてたまらない。

「人助けはいいことだ、ルナ。でも、これは場合が違っぞ。」

「？何で？」

「この男は、『召喚獣』だ。」

「……！」

サラに言われて、よく見てみた。けど、普通の少年にしか見えない。しかし、よく体の周りに纏っている魔力を感じた。この世界のもの

でない、『別の』世界の魔力を帯びている。

「まさか、全然気づかなかった・・・。」

「私も最初は思った。うまく紛れ込ましてる、この世界の人間とそう変わらないように。」

「そ、そうなんだ。じゃあ、この子すごい力の持ち主なんじゃ・・・。」

「だから、まずいんだろ。この森は、人が奥まで来ないようにしてるんだ。こいつが自力で来たのなら、帰れるはずだ。帰るのは勝手だが、ようはその後。」

「私たちのことを言うかもしれないっていうこと？」

サラは、無言で頷いた。確かにまずいかもしれない。

森は、招からざる客人には容赦はしない。だから、『帝国』やその他の大きな国も手出しはしなかった。

でも、ここで普通に暮らすことができたとしたら、話は別になってしまう。

『帝国』は1000年近く昔、この森を召喚術の実験場にしようとしたらしい。

当時の人々は森に入ったりしていなかったで、この森のことはよく知らなかった。

しかし、いざ実験を行おうとして森の中央に入っていけば、召喚師たちは一人も戻らなかった。それが、毎回続き、帝国はこれを不気

味だと思った。何年かして、最近は『加護』というものを作ったらしくて森の奥の手前まで入ることはできるようになったらしいけど、奥までやってこなかった。

「ど、どうしよう・・・っサラ！」

「どうしようって言われてもね。ほつといても、後味が悪いからね・
・仕方がない。もしものときは、口封じをさせてもらつよ。」

サラは、そっぴいながら家の奥に言った。

サラは、召喚術よりも『呪術』と呼ばれる術の方が、得意だ。それは、相手の精神を操ったりすることが出来るものらしいけど、サラはあまり好んで使ったりしなかった。サラ曰く、『気持ちが悪いものだから。』らしい。さっき奥に行ったのも術の準備をするためだ。

はあ、とため息をついた私は、少年の顔を見た。

その子は、私と変わらないくらいの年齢っぽい。召喚獣だからもうちょっと年をいっているかもしれない。顔は、整っていると思う。綺麗な顔をしている、女の私がちょっと嫉妬するほどに。髪は青っぽいような緑のような感じで不思議な色だった。瞳の色は見ていないけど、多分同じぐらい不思議な色をしていると思う。

私は、少年を見ながら、今朝の夢を思い出していた。

そっぴえば、あの『魔女』さんは私のことを『悲しい娘』といって

た。実際考えてみたら私は、全然悲しい思いをしていないように思う。サラを暮らしていて楽しいし、何1つ不自由はない。今日みたいな慌ただしいことは初めてだけど、それ以外はいつもと一緒だ。

「（私は何が・・・悲しいんだろう？）」

思いふけていた。そのときだった。

ベツトに横倒していた少年が、身動きをした。「うう・・・」とか、唸り声を上げていたから、意識はあるようだ。私は、少年の傍に駆け寄った。

彼は、唸りながら眉を顰めて、目を開いた。とても綺麗な瞳だった。吸い込まれるような森の翡翠色の瞳だった。私は、その瞳を呆然と見ていた。彼は、驚いて目を見開いていた。それからどちらともなく呆然と私たちは、見詰め合っていた。

少年は、はったとしたように私をにらみつけた瞬間、私の体は浮き上がった。

「・・・っ！ー！！」

「ぎゃっー！！」

私は胸ぐらをつかまれ、そのまま宙を舞い、彼が寝ていたベットに押さえつけられた。とてつもなく強い力だった。『召喚獣』の特有の力なのか。私は、少し抵抗したが、体を少しだけ動かしたが身動きがとれず、そのまま胸を押さえつけたれた。彼は、目を細めて私を見ていた。そして、口を開いた。

「お前、あいつらの・・・軍人か？」

「ちが・・・っう！ここは、も・・・り・・・『樹海』よ！！」

「何だと・・・？」

質問に私は、苦しまぎれに答えた。

彼は疑っているのか、私を取り抑えた腕は退けなかった。辺りを見回して、考えるような素振りを見せていた。段々と、意識が遠のいていつているような気がした。私は、動かせる手で必死に彼の腕を叩いた。しかし、彼はそれを煩わしく思ったのか、さらに力を込められてますます苦しくなった。

喉は、息をするたびにヒュウヒュウしているのが分かった。呼吸ができなかった。

「そんなことをしても、無駄だ。お前ら・・・この『世界』の人間は、卑劣な人間だ。」

「・・・っ!・・・あっ・・・」

「弱いふりをしていながら、偉そうにする。そして、俺たち『異世界』の人間を奴隷のように扱う。」

「そんな人間の一部のお前を、許すか。」

「私の娘を殺すな!!!」

「・・・なっ!!!」

彼の言葉は、重かった。私に対してだけではなく、この『世界』の人間に対しての憎しみの声だった。怖かった、私には何も言い返すことができなかった。

異変を感じたサラが、この部屋にやってきたようだった。サラは、彼の首に打ち、気を失わせた。力が弱まり、上に乗っていた彼の体は私の上に落ちてきた。ちょっと苦しかったけど、胸を押さえる力がなくなったことで、私は思いっきり息を吸った。

「・・・っはあ、はあ・・・」

「大丈夫かつ!？」

「だ・・・だい・・・じょうぶ。」

サラは、私の上から少年の体を退け、起こしてくれた。そして、力
いっばいに抱きしめた。苦しかったけど、とても安心した。

やりとり（前書き）

誤字脱字があれば、教えて下さると嬉しい限りです。

やりとり

これは、憎しみの御話。

獣がいた、一匹の獣だ。

獣は、吠えた。1つの人影に向かって。

獣は、噛みついた。多くの影に向かって。

獣は、傷ついた。人影から出てくる棒によって。

影は、手を差し出した。獣に向かって。

獣は、捕まれた。黒い手によって。

黒い手は、空を舞った。

“呪い”の始まりだった。

彼が襲いかかってきて、早1時間近くたった。彼は、苦しそうな顔で眠ったままだ、どうやら傷は深く深いみたいだった。それにしても、あれぐらい動けるとなると、回復は早いように思った。

サラは、腕を組み怖い顔で彼を見ている。ヤバいくらい怖い。鬼だ、鬼がいる。美人だから、さらに増してる。

私は何も言えない臆病者なので、私より身長が高いサラを見上げる事しかできない。

「さ、サラさん？」

「ルナ、黙んな。何で襲われた当事者が、そんななんだ。危機感持ちな。」

「そんなこと言われても、彼がこの『世界』の人間を嫌うのは、当たり前だから…」

「そんなこと言って言い訳ないだろ。ルナ、お前はコイツみたいな奴がまた襲ってきたらそう言つつもりか？奴らが付け上がるだけだ、何も変わらない。」

「召喚獣は、みんな世界を恨んでる。自分たちをそういう扱いをする世界をな。でも、もっとも恨んでいるのは、召喚師だ。」

「お前は、憎くて忌むべき世界の人間だ。しかも、“召喚師”だ。お前がやってることは、『優しい』かもしれない。でもコイツにとつては、ただの『偽善』だ。」

「『優しさ』だけじゃ、何も救われないよ。」

サラが言ったことは理解しているつもりだ。何も変わらない、それが現実だ。

私は、世界を知らない。住んでいる世界だけど、何一つ知らない。だけど『帝国』が、世界の軍事力を牛耳っていることは知っているし、『聖王国』は召喚師の王によって政治行われている。でも、召喚獣の扱われ方はよく、知らない。国によって扱われ方は、違う。見世物だったり、奴隷だったりもする。彼は、これよりもっと酷い扱いをされたかもしれない。

……結局、私は彼らからしたら『子供』で、『偽善者』だ。サラは、彼の方に視線を向けていたが、それを私に戻した。そして、ため息をついた。

「まあ、私も同類だ。コイツの気持ちを言った訳じゃない。」

「……………」

「コイツを今はどうこうはしないさ。最初はみんなそうだからな。」

そう言ったサラは、部屋を出て行った。

ドアの音がパタンと鳴り、元々静けさがさらに増した。彼が寝ていると分かる息の音しかなくなった。

私は、何となく彼の近くにはいたくなかったから、窓側にある椅子に座った。相変わらず、森は日が当たらないがいつもと変わらない昼間の森だった。

「私って単純なんだな……」

私は、自分を過信していたと思う。サラに最初彼が、“召喚獣”だと聞いたとき思っていた、『私なら大丈夫』だと。少し多可を括つてた。サラっていう召喚獣と暮らしているから、私たちやこの森のことを分かってくれる、と。

実際は、違う。彼は、生きることには必死だ。彼からしてみれば、この『世界』の人間は、絶対的な“敵”だ。例えこんな風に召喚獣と暮らしていてもだ。

サラは、普通の召喚獣とは違ったところがある。この世界に詳しいし、召喚術に対しても知識がある。比較的、友好だ。だから、私という憎い世界の人間を育ててくれたのかもしれない。

「甘いなあ……ホントにダメだね。」

私は、ため息をついて空を眺めた。

盡く悪意（前書き）

誤字脱字があれば、教えて下さると嬉しい限りです。

蠢く悪意

帝国憲法第163条

『召喚獣』は、絶対服従を誓うべし。

帝国憲法第168条

『召喚獣』は、『人間』を尊重し、従うべし。

・・・コッコッ

「…反乱軍の様子は？」

「今は何とも言えませんが、直に襲撃してくる可能性があります。」

広く長い廊下が続いている。歩いている2つの影は、傾き始めている夕陽によって細く長く伸びていた。

一歩先を歩く影は、後ろの影よりも小さく細い。声の高さから女性だった。

「“樹海”に消えた奴は、どうなった？」

「はっ…それが、…」

「どうした？まさか、逃したのか？」

部下と思われる男が、言葉を濁らせていると女性の声色は、少し低くなった。

部下は慌てたが、すぐに落ち着き、様子を窺うように、女性を怒らせないように言った。

「申し上げにくいのですが、どうやら奴の方は、崖に落ちたらしく・
・・」

「遺体はなく、死んでるか生きてるか分からない状態だと言いた
いのか？」

「はっ……しかし、あの『樹海』です。生きている可能性は……」

ダンッ

「『樹海』だから死んでいるだろ？笑わせるな、奴は『召喚獣』だ。」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・次は、ないと思え。」

「はっ・・・・・・・・」

女性から放たれているのは、確かに殺気だった。男性は黙り込み、そのままの状態で立ったままだ。

女性はその様子に気にする素振りを見せず、男性を横目で見た後、また歩き出した。男性は、足音で気づき、すぐに後ろに着いた。

女性は、正面を向いたまま言う。

「奴を探せ、『樹海』を隈なくだ。」

「はっ・・・しかし・・・」

「次はないと言った。何人の犠牲者を出してもかまわん、奴を探せ。」

「奴の能力は危険だ、『世界』に生かしておくにはいけない。」

そう言つて女性は、重く硬いドアを引き入っていった。部下はそれに敬礼をし、ため息をついた。

傾き始めた陽は、輝きを闇に囚われずにまだ深紅に光っている。

「・・・・・・・・了解しました。將軍。」

部下の重い一言は、廊下に響き渡った。

「失礼します。」

「……遅いぞ、『將軍』。」

ドアの向こう　『將軍』が入った先。
そこは重々しい空気が漂っていた。『將軍』が入って正面には、1
人の老人がいた。周りにも何人かの男たちがいた。陰しく、また『
將軍』を煩わしく見ていた。

『將軍』は視線に気にすることはなく、その場に膝をつき、頭を下げた。

「『將軍』、よく来た。現状報告を聞こうではないか。」

「はっ・・・反乱軍は、1週間前の暴動からは沈黙を保っています。別の件ではありますが、奴らの『リーダー』と思われる男が、『樹海』の方で行方知れずとなっています。」

「・・・・・・・・・・して、その男はどうするつもりだ？」

「今晚からでもすぐに『樹海』に部隊を派遣するつもりです。その男を捕らえることができれば、反乱軍を完全に叩くことが可能かもしれません。」

「可能・・・か。絶対にそやつが反乱軍との関わりを持っているわけではないだろう？」

「いえ、その男は帝都にここ最近、滞在していた『召喚獣』です。少なくとも仲間の1人は、関わりがあるはずです。」

「まあ、『將軍』の勘はよくあたります。様子を見ましょう。」

『將軍』を幾度となく攻め続けていた周りは、仲介の声を聞き、話を止めた。仲介の声を上げた男性は、20代ぐらいの年齢のようでこの中では比較的若かった。特徴的なのは、蒼い長い髪だった。男性は『將軍』を見、微笑んでいた。『將軍』は男の視線も周りの視線も気にしていないようで、ただ何も感じていないようで無表情のままだった。しかし、そんな『將軍』の様子も気にしていないかのように蒼い髪の男性は、笑っていた。そんな男の様子に周りは呆れかえっていた。『、また、始まったか』という声も上がった。

「マックロンダー卿、いい加減その『プレイボーイ』っぷりを会議に持ち込まないでいただきたい。」

「申し訳ありません、ダラス大臣。『將軍』は何せ、美しい方ですから。」

「舐めているのか、青二才が。ここは、パーティーではない!!」

「静粛に。まだ、話は終わっておらん。」

老人の声に周りは黙った。そして、老人は『將軍』に視線を向けた。『將軍』は、未だに頭を下げ、老人の言葉を待った。

「『將軍』、今回の反乱軍の件。貴公に任せる。軍をいくらか使っても構わん。……何としても反乱軍を潰せ。この『帝国』に危険分子を1つ残すな。」

「はっ……了解しました、皇帝陛下。」

『將軍』は、会議でその時初めて頭を上げた。

異界の者たち（前書き）

遅くなりました。読んで下さると嬉しいです。

異界の者たち

『樹海』の夜は、暗くて怖い。不気味な感じが漂う。

でも、酷く優しい感じがする。

そう、もう忘れた“故郷”の記憶の中に。

「くっ……」

目を覚ましたら、見知らぬ天井だった。木でできていて、その木を見ていると築何年か建っているように思えた。体を起き上がらせると、全身が鈍い痛みが走った。特に肩の痛みは、一番強かった。そういえば夢見が悪かった。いきなり女が出て来て、しかもその女はこの世界の人間で思わず俺は、首を絞めたつていう夢だ。周りを見回した。どうやら、助けてくれた奴はいないようだった。

薄暗い室内は、窓から月の光が入ってきてようやく明るさを持っているようだ。

とりあえず俺は起き上がった。ここに長くいる訳にはいけない、仲間”のところに帰らないとまずい。

酒場の人間が言っていたことが、本当ならなおさら

「うつ…!？」

歩き出した瞬間、全身に痛みが走った。立っていることができなくなって、その場に倒れ込んだ。

思ったよりも傷は深かったようだ。苦し紛れに息を零した。傷の中で最も酷いのは肩のようだった、最後に軍の『人間』に撃たれた傷だ。

忌々しく感じた、縛られているようで。人間に犯されない、禁忌の森まで逃げてきたというのに未だに人間は俺に絡みつき離そうとしないようだ。歯を食いしばり唸りながら、立ち上がった。どうやら

足は無事のようだ。

俺は、ドアノブに手をかけて扉を開けた。周りは薄暗く、どうやら住人は寝ているようだ。音を立てないように扉を閉めて、廊下を歩いた。家の中は、特に広くもなく狭くなく、普通の家だった。しばらく歩いていると玄關らしき扉を見つけ俺は、迷わずに開けた。扉の向こうには、不気味に光る木々が俺を見下していた。扉を音を立てずに閉め、周りを見渡した。この家の周りは木々が少ない様子から家を建てたときに意図的に伐ったのだと推測ができた。

ガササッ

『樹海』の木々は、怪しく音を鳴り響かせた。俺を森の奥に誘うかのように。

俺は、一歩ずつ歩き出した。森の意思に取り付かれたかのようにだったが、俺は正気だった。歩き出すと木々は一層、音を鳴らした。本当に意思があるようで、半信半疑だった俺は、仲間の言っていたことは本当だということを信じるしかなかった。だが、ここになって不安が過ぎった。『樹海』は、敵とみなした客に容赦はしないという話だ。逆に気に入った客は無事に帰らせてくれるという話はあったが、俄かには信じられなかった。俺は、立ち止まった。しかし、木々は俺の心を知ってか知らずか、不気味な音を鳴らし続ける。

これは、賭けに出るしかない俺は思った。運に任せることは不本意だが、自然には俺のような『召喚獣』も太刀打ちできない、それが『異世界』の自然でも。俺は手を握り締め、再び歩み始めた。

しばらく歩いていると、湖が見えた。昼の姿は美しいのだろうが、夜の姿は森の力を借りているせいか、恐ろしく思えた。だた、湖のちょうど真ん中に光っている月がなによりも救いだった。

「美しいだろう？」

「っ！！！？」

いきなり声が聞こえた。今まで森の不気味さに気を捕らっていたため、近づいていた存在に気づかなかった。声を聞こえたほうを見ると、金色の髪を靡かせながら女が近づいてきた。俺はその様子にすばやく構えた。女は気にする様子もなく、湖のほうに近寄った。そして、その場に座り湖の水を掬った。

「安心しろ、私はお前と同類だ。『竜』の民よ。」

「同じだとっ！！？…………お前もここに囚われたのか。」

「……………そうだな。」

女の気を辿っていくと同郷とは違うが、この世界とは違う臭いがした。・・・この臭いは、俺たちの世界のやつらが最も嫌う臭いだ。煙臭く、鼻の中がむずむずする。そして一番キライとする、呪詛の臭いだ。

「・・・・・・・・お前、エレニアムの者か。」

「そういう貴様は、ヒューレイの奴だな。道理で、あの子が助けたときからきな臭くて仕方なかったのか。」

「・・・『あの子』とは、俺を助けた女ことか。」

「そうだ。助けてやったというのに恩を仇で返しても、お前を見捨てなかったこの『世界』の人間の娘だ。」

「・・・・・・・・。」

そいつは、気持ちがいいぐらいの笑顔で平然と言って退けてきた。流石、エレニアムの奴だ。相変わらず、俺たちと馬が合わないということが精々しいぐらい分かった。仲間に再会したときは、気をつけるともう一度言っておこう。

女は、俺の様子を見た後にため息をついた。俺に対しての呆れだと思っが、むしろ俺を助けた女に対してついたらと思った。やはり、あれは夢ではなくて本当だったようだ。

「・・・あの子は、どうも甘いな。人に対して優しすぎる、あれではいつか殺されてしまうな。お前のような奴によって。」

「だったら、言い聞かせればいいだろう。俺としてはなぜ『異界』の者が、この『世界』の人間と一緒にいるのかを聞きたいところだな。」

「あの子は私が育てた。だから、分かる。あの子は人の話を聞く子じゃないさ。」

「・・・人間を育てた？何のためにだ。」

「おや、随分冷静だね。酷く当たってくれたが。」

「気に食わないが、お前は頭がいいようだ。何か企んでいると思うほうが自然だと思うが？」

女は笑った。・・・どうやら馬鹿にされていたようだ。ヒューレイの者は力で従えていると思ったからだ、と言った。確かに俺たちの

世界の奴らは大半がそういう奴らばかりだが、失礼だと思った。
女は一頻り笑い、笑いが止まった途端、口を開いた。その口元は、
まだ三日月のような弧を描いていたが。どうやら、コイツも他のエ
レニアムの奴らとは違い、話が分かるようだ。

「面白いな、久しぶりに退屈を感じないよ。」

「・・・どういう意味だ？」

「お前自身も面白い奴だと思ってね。まあ、あの子を育てたのは何
かを企んだわけじゃないさ。」

「・・・何がある？」

「哀れみさ。」

女は笑った。

『彼』と私

朝日が差し込み、ベットにある膨らみはもぞもぞと動く。しかし、少し動いただけで終わり止まった。

窓の外では、いつものように木々たちが不気味な囁きを慣らしながら、『客人』を見ている。『客人』たちは、いつものように暮らしているようだ。

動かなくなっていた膨らみは、意を決したかのように飛び起きた。

「いけない！いつものように寝てる場合じゃない。あの人のことを見なきゃ！」

飛び起きたのは、ルナだった。ルナは、起きた後すぐに、髪を整えながら着替えを探していた。サラによって整えられていた髪だが、いつもよりボサボサになってしまっているようだ。タンスの手前にあったシンプルなワンピースを取ると、ルナはそれに着替えて身支度をして部屋を出た。

部屋を出た後は、あの少年が寝ている部屋へと向かって歩いた。いつもならサラが起こしてくれるはずなのに今日は、なかった。おかしい、と思いながら私は、部屋へと向かった。

ドアノブを捻り、ドアを開けた。でも、見えるはずの姿がなかった。辺りを見渡してもその姿はなくて、困ってしまった。

「ど、どうしよう。サラ、もしかしてあの人を森の奥に捨ててきたとかじゃないよねっ?」

「ほう、ルナの中の私はそんな血も涙ない奴になっているのか。肝に免じておこうか。」

「さ、サラっ!?!」

後ろを振り向くと、張本人のサラが立っていた。もちろん、凄い笑顔で浮かべながら立っていた。

…怖い、どうしよう。今、命が危険に晒されているような気がして堪らない。この笑顔の時のサラは、怖くて仕方がない。

と、兎に角、あの人のことを聞かないとっ！

「サラ、あの人はどうしたの？」

「さあ、どうしたのかね。私は、血も涙ない冷血野郎だからね？」

「うう…」

良過ぎる笑顔だ。怒っている訳じゃないけど、遊んでる。私の反応で遊んでる。視線を反らしながらどうしようかと考える。こうなつた以上、嫌というほどこつてり絞られてしまう可能性が高い。そして、嫌味を言った後には確実に今日1日分の掃除やら洗濯などを押し付けられてしまう。それぐらい、サラはとことん追い詰める質だ。本当に意地が悪すぎると思う。

私がどうしようかと迷っていると、後ろから黒い影が見えた。その黒い影は何やら迷っているようで私の前に姿を現さない。私が後ろばかりを見ていることに気がついたサラは、振り返った。影を見て溜め息をついている。サラは、迷うことなく影に近づいて何かを喋っている。近くににいるけど、声が小さくて聞き取りにくい。何なんだろう、と思っていると、痺れを切らしたらしいサラが、影を引く張って私の前に押し出した。前に現れたのは、あの人だった。

私は驚いて何も言えなくて、後ろにいるサラを見たけど、サラは私の視線を無視してどこかに言ってしまった。

（薄情者っ！どうしてこういうときにいなくなるの！）

そっだ。彼女は追い詰めるのが好きな人だった、楽しんでいるんだ。

と素直に思ってしまった。前にいるあの人は、顔も上げず俯せ、何も言わずにただ黙っているだけだ。私も黙ったままだ。とは言っても嫌われているようだから、何も話せないだけで。間が続いてしまつてお互いに黙ったまま、時間が過ぎた。

暫く経ち、いい加減沈黙が嫌になつてしまった私は、ベットのシーツを取り外し始めた。彼の血や汗のせいですっかり汚れてしまったシーツを布団から取り外していると、彼が少し私に近づいて口を開いた。

「……………すまない。」

「えっ？」

「せつかく助けてもらったというのに、仇で返してしまつて。」

「あつ……………い、いえ。」

「“仕方がない”と言われて、許されても困るな。…………怒ってくれ。」

「…………でも、世界を知らなすぎる私が怒つても。」

私の方が悪いのだ。召喚獣たちは、この『世界』の人間に対して抱いている大きな憎悪を私は、理解仕切れていなかった。サラのような召喚獣もいるということが、私が召喚獣に対して一方的に親しげに接したことが間違いだと思う。でも、逆に敵意剥き出しのままに話しかけてもそれは争いへと発展してしまう可能性がある。難しい、私みたいな子どもが考えても無駄のような話だ。

彼は、何も感じていないような瞳で私を見つめていた。彼の瞳は、綺麗だった。私は、サラの紅い瞳が一番綺麗と思っていた。しかし、彼の瞳はサラ以上に綺麗だった。翡翠のような色をしているのに日に当たると実物は見たことはいけど、本の表紙になっていた海のような青色になる。思わず、見つめてしまう。でも、あまり見つめすぎると流石に恥ずかしくなり、視線を逸らした。彼は、所謂美形なのだ。美人さんなのです。

人はあまり見たことない私が言うのもどうかと思うけど、彼は今まで1、2位を争うくらいの美人だ。

（ヤバイ、今気づいたら私とても恥ずかしいことしてるっ！？）

今の私の顔は、凄く変な顔をしているはずだ。もしくは、百面相をしてる。

どうしようと考えていると彼が吹き出した。

驚いて顔を上げてみると、少しお腹を抱えながら、おもいきりともでは言わないけど、凄く笑っていた。私は呆然として、笑っている彼を見ていた。笑っている彼も私の視線に気づいたようで、笑いを抑えて私に視線を向き直した。

「いやっ…悪いな。いきなり顔が青くなっと思ったたら、赤くなったりして随分百面相をしてるな…」と思って、

「……思わず、笑ってしまったと。」

「ああ。気を悪くしないでくれ、俺の周りには最近あまりそういう顔をしなくてな。懐かしくなったんだ。」

彼は懐かしむようで悲しいような複雑な表情をしながら、そう言つてまた顔を俯せにした。私はただ、戸惑つてしまっただけだった。彼のことを知らない私が、何を言つても無駄だ。それに『召喚獣』ということがそのことに関係している、と私は思った。私の世界は、この人々に畏れられている『樹海』の中だけなのだ。すぐ近くにあるといつても『帝都』については何も知らないのだ。

そう、私は知らないのだ。『召喚獣』は酷い扱いをされていると知つていても、それはどういうことをしているのかを。

顔を俯せていた彼は顔を上げて、私に微笑みかけた。私は、その笑顔に酷く心が痛んだ。

「そういえば、自己紹介してなかったな。」

「あ、えっと、私はルナです。さっき一緒だったから知ってますよね、サラとこの『樹海』で暮らしています。」

「そうか。俺は、シノンだ。ヒューレイという世界から来た『召喚獣』だ。」

「…シノン、さんですか？」

「シノンでいい。さん付けされるのは、柄じゃないからな。」

シノンは、笑って言った。

*

帝都、にて

賑わいを見せている通りを一つ外れると暗い道が広がっている。人間は1人も通っていない、そこが危険だと言われているのが、一目瞭然だった。これが、賢王とたたわれている皇帝に収められており栄華に輝いているという帝国の闇だ。

その暗い暗闇の中に灯りが灯っている。その光から影が幾つも見える。若い男はナイフを光らせながら、その刃を削り、老人は本の上の指を滑らせていた。

その光に入っていく女が、徐に口を開いた。

「彼はどうなったの？」

「分らん、生きていると思いたいが。」

「悲観的なこというなよ。ナタリアが怒鳴るぞ。」

若い男はナイフを削りながら、あらか様に嫌そうな顔をした。『ナタリア』という存在が、よほど面倒くさいようだ。そんな男の表情を気にせず、女はふーん、と言ってポケットから袋を出した。袋にはビスケットが入っているようで、女はそれを一枚取り出し、かじった。灯りは、ただ様子を照らしていた。

「アイツがいなくても俺たちだけで作戦は実行する。」

「ナタリアが黙っていないよ、イワン。」

「アイツが言ったといえ、するだろナタリアは。」

「……そうだね。」

女は、暗い瞳を灯りに向けた。暖かい光だが、自分たちには酷く痛いようなものだ。まるで、自分たちはこの『世界』の太陽を浴びてはいけない、と諭されているだ。そして、同時に哀れむ存在のことを思った。彼に対して報われない愛情を抱く存在に。

「ナタリアは、彼のお人形さんだからね。」

辺りは、沈黙しなかった。

獣と安らぎ

強大な力は、小さな安らぎを奪い去る。

すべてのものを焼き払い、消し去ってしまう。

この世は弱肉強食の世界だ。力がないものは消え去っていく運命しかない。

そう、力こそがすべて。

力こそが権力の証。

“力こそが正義”

カミユル・ベイグリ・デュレ

（帝国・第1将軍）

彼、シノンを助けてもう1週間ぐらい経つ。急いで仲間の元に帰ろうとしていたように見えた彼は、別にそんな様子もなく、毎日ゆっ

くり治療に専念している。どういう風の吹き回しかは、全然分らないけど助けたあの日の夜にサラと何かを話していた様子だった。サラ、余計なことを言っていないだろうか。ちょっと不安になってきた。聞いてみても特に何も無い、と2人ともいうので、私は何も言えなくなってしまった。

2人は異世界出身同士なので、少しは馬が合うようでよく話している様子を見かける。そんな様子を見ている私は、あまりいい気分じゃない。小さい頃から一緒だった母親的存在のサラをシノンに取られた気分だ。でも、前にこの感じていくと、私は多分なかなか親離れできないな、と思つて笑つてしまった。その様子を見ていたサラについて頭が逝ったか、と言われたときは、頭にきてしまった。お陰で目が覚めてしまつて、何にも思わなくなつた。

今、サラが昼ご飯の支度をしており、シノンにはちよつとばかり果物を取りに行つて貰つてる。私は何をしてるかという、召喚術の修行中だ。

召喚師は本来一体召喚獣を喚び、一体だけと誓約をするだけである。それに常に誓約している召喚獣をこの世界に喚び留めるではなく、元の世界にいてもらい、力が必要な時だけこの世界にいてもらうのだ。でも、喚び留めて元の世界に帰れなくしてしまう誓約の仕方もある。ある言葉を紡ぐだけで出来るらしいけど、私は教えて貰わなかった。必要ないだろうし。それによつて留められてしまったのが、シノンたちなのだ。他には召喚獣が喚んだ状態で召喚師が死んでしまった場合は、自動的に誓約がなくなり、召喚獣は元の世界へと帰るので、こういうことは起こらない。

召喚師と認めて貰うには、召喚獣一体と誓約しなくてはならない。認めてもらうといつても難しいことではなく、ただ単に召喚獣に認めてもらうということだ。召喚術の国と呼ばれている『聖王国』では、周りに試験官いて無理矢理、召喚獣を抑え込んで認めさせたりするらしい。しかし、本来は喚ばれた召喚獣がその術者が自分よりも格下なら、さっさと元の世界に還つたりするらしい。喚ばれた時

は、誓約をしていないので喚んだ術者より強い召喚獣は還ることが出来るらしい。本来は、一番に認めてもらわなくてはならないのは、これから一生のパートナーとなる召喚獣なのだ。でも、いつからかその法則は崩れてしまっている。……何だか嫌な気分になってしまった。

溜め息をつき、周りの森を見渡した。いつものように穏やかな風によつて木々が揺れている。嫌なことがあったり悲しいことがあると『樹海』の木々たちを私は、見つめる。私は小さい頃から住んでいるから外部の人間が抱く恐怖は一切ない。むしろ懐かしい、暖かい気持ちになる。

ここに来た時は、サラは怖かったと言っていた。どうして、と私が聞くとサラは笑いながら言った。何か大きなものに見られているようだからだ、と。小さい私も今の私もそんなことはなかった。変なのかな私。気を取り直して古びた杖を両手に持ち直した。まず、心を落ち着かして自然と一体になる。

私は不思議なようで、手順をこなしていった。陣も完成し、息を大きく吸い込み、誓いの言葉を言った。

『デューレ・マルヘス・シミュル』

“我、古の盟約に応じる”と

その瞬間、私の周りの陣は光を放ち、大きな音とともに爆発した。私は、爆風に耐えきれず、身体が飛んだ。転がりながらも受け身を取り、木にぶつかって止まった。問題の陣は、未だに大きな煙を上げており、止まることを知らないようだった。

爆風音に気がついたシノンとサラが、慌てたように私の元にやってきた。シノンは、私の身体を見て怪我をしていないか、とか優しい言葉をかけてくれながら、身体を起こすのを手伝ってくれた。しかし、サラは怖かった。美人が怒ると怖いというが、本当にヤバイ。腕を組ながら私を見下して、尚且つ額には青筋が見えるようで顔を直視できない。そんなサラと私を見かねてか、シノンは助け舟を出してくれ、今は召喚した召喚獣の様子を見ることにした。

視線を向けるとそこに立っていたのは、子供だった。子供はキヨロキヨロ辺りを見渡して、どうやら私が召喚した人間だと分かったらしい、迷わずに私の前までやってきた。煩わしそうな面倒くさそうな視線を私に向けながら、上から下まで見てくる。どうやら、見た感じ女の子のようだった。

サラとシノンは少し離れて、私たちの様子を伺っていた。まあ、この子に認めてもらわなかったら私、召喚師になれないしね。2人の心配そうな視線を受けながら、私はただ召喚したこの子を見ていた。暫くすると、彼女は欠伸をして腕を伸ばした。寝起きのようで、機嫌が悪そうだった。

「お前が、喚んだのか？」

「う、うん。私はルナよ。」

「そうか、ルナか。……………」

「

「えっ？」

彼女は、最後に小さく零したようだったが、うまく聞き取ることができなかった。また私をじっと見つめた後に、ぼそつと零した。

誓約をする、と。私が喜んでいる暇もなく、彼女は『エンダ』と名乗って早々に消えてしまった。ただ、陣を呆然と見つめている私にサラが肩に手を乗せた。……笑っている、今の様子がツボだったようだ。シノンも若干笑ってる。そんなに面白いですか、そうですか。

私が拗ねていると分かり、流石に笑うのを止めた2人だけど、肩が震えている。もう、笑うんだったら盛大に笑ってほしい気分になった。笑いが収まったらしいサラは、涙目になっている瞳から流れている涙をふきながら、苦しそうに言った。

「いや、面白いなっ……やったな、ルナ。晴れて召喚師になったぞ。」

「……取って付けられた誉めかたなんて嬉しくないよ。」

「そんな訳じゃないって。それにしても、エンダだっけ？……あの子、強いな。」

笑いが収まったらしいシノンが、私の頭を撫でながら言った。関係ないかもしれないけど、最近シノンは、私をどう見ても妹扱いしてくる。そんなに幼いか、私は。

サラはそんなシノンの言葉に同意するようにそうだな、と言って急に、真剣な眼差しを私に向けてきた。サラのそんな表情に戸惑いながらも、さつき早々に還っていったエンダを思い出した。銀髪の髪はとても綺麗で、一緒にある紫色の瞳も宝石のようだった。白い肌に白いワンピース、そんな白尽くしの彼女だったが、妙に惹かれるものが沢山あった。

色々謎が謎をよんで居るような気がたまらないけど、多分絶対そうだと確信できてしまうことが嫌だった。

＊

「どうする気だ、貴様は。」

エンダは、湖に向かって言い放った。しかし何か変化をするわけでもなく、ただ湖は波紋を造るだけだった。そんな様子にエンダは痺れを切らしているようだが、此处にはエンダ以外の存在は見られないようだ。

エンダは舌打ちをして湖を離れた。少し歩くと、そこには湧き水が溢れている場所があった。彼女はそこに近づくと、溢れ出ている湧き水を飲むわけでもなく、ただ水を見つめていた。そこには、ルナによって召喚された『樹海』の入り口の様子があった。つまらなそ

うに見つめていたが、エンドは多分、こいつらに関わらなくてはならないだろうな、と頭の片隅で思っていた。それと同時にあの煩わしい存在を恨んだ。

水面に移されているのは、帝国の將軍だ。かなりの実力者だと、エンドは素直に思った。

『急ぐぞ、ここに奴がいる。』

「あの子たちが逃げ切れるかは、私に関わるのか。」

『いいか、逃すな。燃やしても構わん、炙り出せ。』

「罰あたりなことをする。だが、面白いな。」

『帝国の地位を揺るがすことは赦されない。しかし、このまま奴を殺しはしない。』

「……しかしこの女、」

『いいか、生け捕りだ。覚悟はいいな。』

「……“召喚獣”の匂いにするな。」

『続け！帝国に栄光あれ！！』

暗闇の客人（前書き）

3話一気に更新しました。また暫く、更新しないかもしれません。
誤字脱字があれば、申し訳ないです m (| |) m

暗闇の客人

どうして、捕まえられたの？

獣は言った。獣の前の影は答えた。

それは、君たちが悪いことをしたからさ。

獣は言った。

僕は、君に何もしてない！

影は、嘲笑った。獣に対して笑った。

君たちは、君たちを信じていた我らの王を裏切ったのに。そんなことをいうのかい？

獣は、困った。身に覚えがないからだ。

そんなことはしていない！

影は、信じられないと首を横に振った。

信じられないな。悪いが君たちには、罰を受けてもらおうか。

影は、腕を振った。そこに、黒い穴が現れた。

ストイ、ル、アルン、ページエ

“我らに、光は灯る”

酷く寝苦しいかった。いつものように老いぼれの爺どものお小言を言われては、気分が悪くなった。家の家系を酷く憎んだ。その日は勉強する気も起きなくて、すぐにベットに潜って目を閉じた。しかし、なかなか寝付くことができなくて、仕方がなく起き上がり、バルコニーへと足を運んだ。

バルコニーに出て、手すりを持ち、都を見渡した。ここは先祖代々守り続けていた美しき都だ。しかし、今では貴族たちにただ食いつぶされている餌に成り下がってしまっている。先祖が哀れだと思っていた。命を懸けて守り続けているはずの都に恩を仇でかえし続けられている様子に。と、同時に自分もこんな汚い都の為に命を投げ捨てると考えると、怒りに体が震えてしまった。手を握りしめて、今にも爆発させてしまいそうな怒りをどうにか抑えた。そして、そんな怒りも、哀れなものだと思い、嘲笑ってしまった。感情的になった自分に対しても愚かなものだと思った。

空を見上げると、世界中の人間に平等に光を降り注ぐ月の姿を見た。月は、ただ金色に光り、今の自分の姿を見せつけているように思えた。

溜め息をつき、頭も冷えただろうと思い、部屋へと足を向けた時だ

った。

「動くな。」

「……っ！なっ……」

「声も出さな、出したら殺す。」

首にナイフが当たった。月の光によって鈍く青く照らされていた。声は、男のものだ。俺よりも少し年上だと思う。男の気配は一切分からなかった。こう見えても俺は、剣術の心構えを持っており、武人だ。しかし、感じ取れなかった。相当な手練れだろうと思った、少なくとも俺より数段上だ。俺は男の指示に従い、黙り込み、両手を上げた。俺が抵抗する気はないと分かった男は、俺の背中を押し

て部屋の中へと入れた。

部屋に入ると男は、バルコニーへと続く扉を閉めた。そして、押されてバランスを崩してしまい、床に座り込む俺の方へとやってきた。何をする気かと思えば、男は被っていた布を外した。

一瞬で、馬鹿だと思った。

敵に顔を見せる密偵がいるかといえば、いいえだ。俺の中ではそれが常識だ。しかし、目の前の男は躊躇うこともなく布を外し、顔を外気に晒した。やはり、顔から見ても男が俺よりも年上だと思った。そして、この『世界』の人間にない耳が生えていた。

男は、外した布を巻き取り自分の懐へと納めた。座り込む俺に視線を合わすように男は、座った。どうすればいいか分からない俺は、ただ視線を向けるだけだ。すると黙っていた男は、口を開いた。

「兄ちゃん、名前は？」

「知ってて来たんじゃないのか？」

「いや、軍部に入り込めれば俺はよかったからな。あんたのことな

んかこれっぽっちも知らねえな。」

男は、少し笑いながら言った。俺は、こいつはただの馬鹿だと思った。

自分よりも腕の立つ將軍や大佐にだったらどうするんだ、と思った。どうやら本当に何も考えてなかったらしく、これからどうしようかねえ、と呟いている。おい、聞こえてるぞ。

敵でまだ会って間もない俺に、兄ちゃん、お茶くれねえか、と言いつ出す始末だ。

（あ、アホだ。何しに来たんだ。）

俺は、溜め息をついてしまった。真面目に考えていることが馬鹿馬鹿しくて、そんな自分を何だか哀れんでしまった。

「あ、自分から名前は名乗るべきだな。俺は、アイクだ。兄ちゃん
は？」

「……ローレン・ハフニウム。」

「へえ、ローレンっていうだな。俺は、ちょっくら聞きてえことが
あつて忍び込んだ。」

「俺が、軍の機密事項を話すと思うか？」

「いや、俺が聞きてえのは違うことだ。軍とは関係ないんだ。」

一体何を聞きたいのか分からない。この男、アイクは何を考えているのか。周りにはいない質なので、益々頭が回らなくなってきた。アイクはそんな俺の様子を気づいたようでもなく部屋を見ながら、お前貴族か何かか、呟いていた。……酷く頭が痛くなってきた、明日頭痛がきたらこいつのせいにしてようと胸の底で思った。

「あ、俺が聞きたいのは仲間のことさ。」

「仲間、だと？」

「丁度一週間前だ、樹海に召喚獣が入らなかったか？」

「…………知らないな。」

「前の沈黙は、肯定と取るぜ。ローレン。」

馴れ馴れしい奴だと、思った。それとは逆に自然と普通に話している自分自身に驚いていた。しかし、軍部に関わる話をしなとは言ったのに、こいつはそれを無視か。何で言うてくれないんだよっ！、と怒鳴ってくるアイクに哀れみというか馬鹿じゃないとかとう視線を向けた。とてつもなく阿呆だと思った。しかし、勘だけは鋭いよ。うで直ぐに俺が、仲間のことを知っていると分かったみたいだ。何だか、複雑すぎる。

答えない俺に痺れを切らしながら、頭をガシガシとかいている。そういえば、こいつは召喚獣だ。耳があるということはヒューレイの世界の奴だと分かった。報告に聞いている『反乱軍』は、ヒューレイが中心だった、ということとは。

「貴様、反乱軍の者か？」

「いや、ちげえ。関わりがないと言えば嘘だけど、俺は正式に反乱軍加わってねえ。」

「だが、反乱軍と関わりがあるなら、生かして帰すわけには行かない。」

「止めときな、ローレン。お前さんじゃ、俺を殺せねえ。それにな、」

「……」

「俺たちヒューレイは、仲間、家族を売るようなことはしねえ。お前が、ここで大将を呼んだとして、俺が捕まるうが、仲間のことは絶対言わねえ。」

「それが、俺たちの『掟』だ。だが、反乱軍の若僧どもは分かっちゃいね。」

「何がた？」

「あいつらは、掟に背いた。仲間を犠牲にしても軍に喧嘩売る気だろうな。それを俺は見過ごすことが出来ねえ。」

「だから、樹海に入った奴のことを知りたいと言うのか？……無駄だ、あそこは別名『死の森』。生きてかえってくる筈もない。」

「言っただろう、俺たちは仲間、家族を見捨てねえ。だから、俺は仲間を助けてえんだ。」

「……」

「力を貸してくれ、ローレン。あの馬鹿どもを止めるには、『樹海』に入った奴、シノンが必要なんだ。」

「シノン、というのは、反乱軍のリーダーか？」

「……まあ、そんなもんだ。」

アイクは先程まで見せていたアホ面を無くして、真面目な顔になった。俺はその顔に畏怖を覚えた。昔の、アイツの顔に重なったからだ。それは思い出したいくない過去に近い。そのせいか酷く、汗をかいた。俺には、到底真似が出来ないものだからだ。

どうして、そんなに一生懸命になれるのが分からない。しかし、アイクは言った。仲間を、家族を見捨てる訳にはいかないと。

俺は黙り込み、アイクには顔を見えないように俯せた。しかし、そんな様子に気にせず俺に視線を向け続けてくる。

そんな目を向けないでほしい、俺はそんなことをしない人間だからだ。初めて会ったばかりの俺に何故そんなにも信頼しているかのようについてくるのが、分からなかった。

だが、逆に面白いと思った。アイクを利用して反乱軍と交渉ができれば、こんな醜い都を潰せると思った。俺は、口元を三日月に描いた。言いなりなんかになり下がるものか、壊してみよう。

「アイク、いいだろう。協力してやる。」

「っ！本当か！」

「ああ、但し条件がある。それを吞んでくれるなら構わない。」

「何だ、俺が叶えられる範囲なら構わないが？」

「少し、そのシノンという奴と話してみたいんだ。……いいか？」

暗闇のなか、月が嘲笑った。

ある森に住んでいる召喚獣の話（前書き）

サラの視点です。

小話とかではなく、ちゃんと続きます。

ある森に住んでいる召喚獣の話

この森は、呪われている

昔からこの世界の人間は言っていた。

私は、ただ興味を持った。

私たちを『道具』として召喚した奴らが何故、ここを畏れるのか。

ただ、好奇心に誘われただけだった。

だが、私にも『ここ』が異常なのかが分かった。

ここに訪れて、分かったことがある。

『樹海』は、覆われているのだ。何か、大きな力によって。何かを守るかのように。

清々しく気持ちよく朝起きた事とは裏腹に、嫌な予感がしていた。今から1週間前、ルナの召喚術が成功したときは、嘘だと思った。いくら才能があるといってもあんな高位な召喚獣が、喚び出すことなど出来ない筈だ。胸騒ぎがしていた。自分は間違った選択をしたのではないかと。こんな風になったのは、15年前にルナを拾ったときだった。

（あの子には、何かあるのか？）

いつも思ってしまったている。あの子が何かする度に感じてしまう違和感だ。さっきの召喚獣、エンダもそうだ。アイツは、危険だ。動物としての本能が働いている。関わってしまうと取り返しのつかないことになりそう。しかし、エンダは何処の世界の奴か分からなかった。気配は召喚獣なのに雰囲気はこの『世界』の住人と同じ感じだった。シノンも不信感を抱いていた。匂いは俺たちと同じようなのに、召喚獣というには変だ、と言っていた。ルナは何かあるのか、とも聞いてきたが、私は何も答える事が出来なかった。

私自身、ルナの出生はよく分からない。偶々、だった。旅をしていて、この森にたどり着く手前の道先に棄てられていたのが、ルナだ。

それ以外は、知らない。その当時、帝国は聖王国と争っていた。争いといっても本格的な戦争ではなく、ただ緊迫な状態を保っていただけだ。しかし、その裏で帝国は、聖王国を攻撃するために兵力を増やしていた。多くの男たち、その中の大半は少年だったらしいが、随分と徴兵されていったらしい。ルナの父親も恐らく徴兵されてしまったのだらう。その状態を両国とも保っていたが、ついに戦争は始まった。しかし、それは帝国と聖王国との戦いではなく、召喚獣たちの反乱だった。珍しくはなかった反乱だが、そのときは状況が違った。どうやら、相当強い召喚獣がいたらしく、帝国、聖王国ともに多くの人々が亡くなった。その中には、ルナの両親もいたのだらう、あの子が捨て子になったのもこの時期だと思う。もちろん、それ相応に召喚獣たちにも被害があった。しかし、やはり召喚術を使う召喚師たちの前に召喚獣たちは、負けてしまった。それからというものの、両国では召喚獣に対する扱いが悪化した。以前よりも人々による迫害も増えてきた。町にもそんなに出歩くことができなくなってしまうた。

恐らくシノンは、反乱後にやってきたのだと思う。随分と人を憎んでいた。反乱以前からも人間に対して憎悪を抱いていた者も多かったが、どうやらシノンの仲間はその意識が高いような気がした。それと同時に仲間と言っても、「捨て駒」の扱いのようだ。ヒューレイは元々、家族や仲間を大切に扱い、その者たちが危機に陥ったときは助けにいくことが、掟だったはずだ。しかし、シノンがやってきてもう2週間も経っているが、全くその気配がない。シノンも言っていた、俺のことは誰も助けには来ない、と。そして、仲間たちにはやるべきことを伝えてある、と言っていた。腑に落ちないところが多すぎて、何から聞けばいいか一瞬分からなくなった。

お前はそれでいいのか、森から出た後に仲間のところにそれこそ帰れなくなるんじゃないのか、と。色々聞きたいことがあった。でも、もしこのままシノンが帰ってしまつて悲しむのは誰か、と言えば私は分かる。それくらい、ルナはシノンに惹かれているのが。偶然だ

った、というにはタイミングが良すぎた。

嫌な胸騒ぎは、益々心の奥底で増し続けている。

その夜、森に銃声が響いた。そして、暗い闇の中に対抗するかのよう
うに、赤い、赤い、赤い炎が舞い上がっていた。

巡ってきたもの

森は、炎に覆われていた。

動物たちは、熱く痛いその悪魔から必死になって逃げていた。木々たちは、鈍い音を立てながら、崩れ落ちていく。火の手は、奥へ奥へと導かれていた。それは、もちろん母子のもとにも届いていた。

「……この炎はっ……！」

「ルナ、早く荷物を詰めな。」

炎の『臭い』がする。鼻が利くサラは、家の外から慌てて戻ってきたときに言った。ルナは、一瞬何のことか分からなかった。この『樹海』は、人々は決して火を放ったりしない。それ程恐れられているからだ。しかし、サラの慌てように驚きながらも本当だということが、今分かった。森の木々は、焼け落ち、ルナの家は森の随分奥にあるというのにたくさんの動物たちが、こちらに向かって走っていく姿を見れば、嫌でも分かってしまった。

ルナが呆然とする中、サラはまるでこうなることは分かっていたかのように冷静に最低限の荷物を詰めていた。ルナは、益々困惑するばかりでどうすることもできなかった。それは、状況を見ていたシンンも同じだった。驚愕に満ちた顔は、何かを考えているようにも

見えた。サラは、そんな二人の様子をため息をつきながら、荷物の袋を閉じた。そして、二人の背中を押した。二人は呆然とした顔でサラを見ていた。サラは、早くしろと言わんとばかりにさっさと玄関に歩いていき、扉を開けて外へ出て行った。ルナは気がつき、慌ててサラの後ろを追っていった。しかし、玄関を出かけたところで後ろを振り返った。そこに一向にその場から動こうとしないシノンがいた。ルナはシノンの傍に駆け寄り、その腕を手にとって引っぱった。しかし、流石に体格の差があるためか、中々動かない。それに加えて、シノンが動こうとしないこともあって、引っ張ることが出来なかった。

「シノン、どうしたの？早くしないと森が、」

「……俺のせいだ、俺のせいなんだ。」

「え？」

シノンは何かを呟いたが、ルナには聞こえなかった。しかし、無表情になり、目を見開いて、その顔にルナは、ただ事ではないと直感的に悟った。ルナは、シノンの右手を両手で覆うように包み込み、子供を落ち着かせるかのように右手をただ暖めた。

その温もりに落ち着いてきたのか、シノンは我に返ってルナの顔を見てきた。ルナは見つめられたことでどきつとしたが、何とか表情

に出さずに落ち着いてシノンの顔を見ることができた。

「……………いや、何でもない。急ごう。」

「えっ……………あ、うん。」

先ほどの様子とは一変し、シノンはルナを正面から見た後、彼女の手を握り締めて扉から出て行ったサラの元へ急いだ。ルナはその変わりように驚いていた。さっきの様子は何だったのだろうかというぐらい変わった。何かを呟いていた事も気になるが、今は広がりつつある森の炎から逃げるべきだと思い、そのまま引つ張られていった。

サラは、来るのが遅いと言言つて森の奥へと進んでいった。彼女はシノンの変わりようを見ていないので、何も気にした様子もなく迷わずに歩いていった。シノンはルナの手をまた握り返した後、その手を引つ張り、ルナを少し引きずる形でサラの後を追っていった。ルナは何も言わずにただ、歩いていた。家の手前まで炎は辿りつきかけていた。家の周りを見渡すと、逃げ遅れたであろう動物たちの死体が崩れ落ちた木々の下に倒れていた。その姿は痛々しくてルナは目線を逸らした。そして、どうしてこんなことになってしまっているのかを考えた。この森は人々に恐れられていたものだ。絶対に焼き払うなどという罰当たりなことはこの周辺の村、町の間人は考

えない。むしろ、何かお供え物をして供養してくるはずだ。もしこんなことをするとしたら、そう考えていた矢先、三人の前に1つの影が現れた。影は、だいたい人間の形をしていて、少なくともこの森に住んでいる動物ではない。そうすれば、考えられることは一つだった。

サラは、瞬時に威嚇した。ここに現れるとすれば、この『樹海』を焼き払った人間しかいないからだ。ルナの手を握っていたシノンの手にも力が入った。その力の強さにルナは少し顔を顰めたが、それよりもまず目の前の影が気になり、どうでもよくなった。

しかし、その影は何もするわけでもなくただじっとこちらの様子を伺うかのように見ているようだった。サラも何なのだ、と言いたげに顔を顰め、その影を睨みつけていた。シノンもだんだんと手を握っていた力を緩めていた。しばらくすると影は何もするわけでもなく、こちらに背を向けて歩き始めた。まるでついて来い、と言っているかのような様子に一番驚きを見せていたのは、シノンだった。彼は思っていたのだ。あれは帝国の軍人で、自分を『捕まえ』に来たのだと。しかし、様子外の展開に少しついていけなくなったのだ。

怪しむのも馬鹿馬鹿しくなった三人は、その影を追うかのように歩いていった。しかし、完全に警戒を緩めたわけではない。この影がもしも人間だとすれば、そう考えたことで嫌な予感しかしなくなった。影の後を追ってしばらく歩いていると、森の普段使用している反対側の入り口まで差し掛かっていた。入り口付近の辺りでぼんつと音がするかのようには影も消えうせていった。サラは、特に気にするわけでもなくすぐに入り口へ歩いていった。シノンも後に続こうとしたが、腕に後ろに引く張られる感覚に襲われた。後ろを向くとルナが、無表情でこちらを見つめていた。シノンは、背筋に悪寒が走った。しかし、それとは裏腹に彼女はただ、あれは一体なんだっただろうか、そうぼんやりと考えていた。慌ててシノンの呼びかけた。それによって彼女の思考は、戻ってきた。

「ルナ、どうした？さっきのあの『影』が、何かに見えたのか？」

「え、ううん。そんなことはなくて、何だったのになって思っで。」

ルナの笑顔の様子にシノンは少し不審そうに目を細めて見つめたが、前方から「急げっ！」というサラの声が聞こえてきたため、ルナは先に行ってしまった。彼はまだその後姿に不信感を抱いていたが、今は逃げるのが先決だと考えて、前に進み出した。

入口はもうすぐだ。

作戦は『將軍』が軍議を終えた後、すぐに伝えられた。とは言つても、俺はしがいないただの下っ端と同じような扱いの三等兵士だ。『將軍』から直接伝えられたというわけではなく、俺の隊の隊長から伝えられた。この帝国はだいたい地図で言うところからかなり東のほうにある。それよりも少し東に行った処に今回の任務先の『樹海』だ。俺は少し離れたところに故郷がある。それは『樹海』の方ではなく中心の方に向かってだ。だから、『樹海』なんてものは俺は初めて目に入れて中に入るようになった。

森に入っていたときから何かが可笑しかった。それは俺以外の兵士たちも感じていただろう。この森の周辺に住んでいた奴たちは、いくら『將軍』から命令されたとはいえ、森に火を放つのを躊躇っていた。森の呪いは恐ろしいらしく何を特にされるというわけではないが、確かにこの不気味な森に誰も手を出したくはないだろう。それぐらいこの森は、何かが可笑しかった。

俺は間近で『將軍』を見たことなかったから、今回近くで見て俺より若くてそれに加え女であることに驚いた。そのせいでずっと眺め

ていたせいか、隣にいた同じ部隊の奴ににやにやしながら、「なんだあ？惚れたのか？」とからかう様に言われた。残念だがそうじゃない、むしろ俺よりお前の方が下心があるぞ。

そう言っただけでよかったが、前にいた隊長に咎められ謝っている内に作戦決行といわれ、弁解する時間もなくて作戦が始まった。

火を放ったことで森の動物たちが異変に気づき、森の奥と走って逃げはじめた。俺たちの部隊を合わせて10ぐらいの隊がある先頭に立っていた『将軍』が、合図を出しそれぞれ部隊は一斉に、火を放ちながら森の奥へと入っていった。

木々が焼き落ちたせいで、森に惑わされることがなくなっていた。通常ここに入るために必要な『加護』があるのだが、あいにくそういうものは俺のような下っ端には配給されていない。そのため、ここに入ることが出来るのは、少なくとも俺の小隊長よりも上の者になる。今回の任務は今噂されている『反乱軍』のリーダーを捕らえるか、もしくは殺すかというようにたって響きは簡単そうな任務だ。しかし、奴はここに入る前に大佐クラスの兵を何人が殺してここに辿りつた訳で、それに加えてヒューレイの『召喚獣』らしく、装備している剣も通用するかも分からない。察しの通り、俺のような下っ端では相手にならないということだ。そのためこの任務の指揮は『将軍』自らしているということだ。色々と疲れる話だと思いつつ、足を進めていると隊長が止まるように指示してきた。どうやら固まって動いてもこの森は広すぎるため、奴を見つけられない。そのため、危険だがどうやら各自別れて行動することにするらしい。この様子だと、俺たち下っ端は捨て駒にされるようだ。俺はすぐに思った。どうやら隊の他の兵士も気づいたらしく、隊長に苦い顔を見せていた。

「各自健闘を祈る。別々に行動してくれ。」

無情だと思った。

しかし、これは命令だ。聞かなくては命令違反でその場で斬り殺される。皆嫌そうな顔をしていたが、各自それぞれ移動をし始めた。俺は、すぐに自分の手前の方に見えていた湖に歩きはじめた。

所詮、これまでか。下っ端の三等兵なんかこのような扱いをされるのが、当たり前だ。俺は別に好きで兵士になった訳ではなく、ただ寝泊りあり三食食事付き、おまけに兵士というだけで様々な物資を無料にもらえるという魅力的な特典に惹かれて兵士になった。それでも、俺とは違って上に昇って『將軍』とまでは言わないが、大佐や中佐あたりに昇進して国で活躍したいと言っていた同期もいた。そういう奴は自分の能力を向上したりして自力で這い上がっていった奴もいたが、ここは人間だから上司に賄賂という形で都合よく上

にいった奴もいた。俺はそんなことを気にもせず、特に努力するわけでもなくいつの間にか入隊して4年も経っていた。俺の同期の3分の1ぐらいは結構な地位についていた。とはいってもまだまだ、軍では下っ端のほうだが、少なくとも今の俺よりも遥かに上の方へとなっていた。気がついたら俺の同期で俺と同じ三等兵は、10人ぐらいになっていた。何も努力しようとしなかったせいでここで『召喚獣』に殺されてしまうのかと思うと、笑える話だ。

そんなことを考えながら湖の方へと歩いていると何やら大きな足跡があった。全体的に不気味さを現している爪だと思えるところには鋭く尖っていた。これが噂の『召喚獣』のものなのか、瞬時に態勢を整えて剣を構えた。構えるだけでは何だか不安だったので剣を抜き、構えをとりながら辺りをゆっくり見渡して、神経を研ぎ澄ましていた。風が吹き、焼け落ちた木々の葉っぱを飛ばして行った。動物たちも森の奥へと逃れて行ったのか、ここには何もいないだった。しばらく剣を持ち、注意深く見ていたが特に何も変わる様子はなく、それに加えてもし『召喚獣』がいるのならもうすでに俺の首を噛み切っているだろうな、と思った。我ながら先ほどの素人が分かるぐらい無防備だったからだ。いつまで経っても何も来るようはないので、剣を納めた。この足跡は疑問に残ることが多くあるが、今は任務が先だ。これは後で報告しようと思い、また湖へと足を進めた。

湖にはあっけなくついた。帝国では見ることができないほどの美しい湖だ。これで周辺の木々もあれば最高な場所なんだろうなと暢気なことを考えながら湖の周りをうろつき始めた。俺がここに来たのは、特に何もなく近くにあったからだ、作戦も何もへったくりもない。湖の水面は透き通っていて俺の顔を写すだけではなく、頭上高くにある空の雲もその水面に写していた。それをしばらくただじっと見つめていた。

「貴様、そこで何をしている。」

「っ！！！あ、申し訳ありません！！！」

じっと見つめていたら、どこから声を掛けられた。言動から考えれば、俺よりも上の地位の奴だ。面倒なことにならないように俺はすぐに頭を下げて謝った。相手も俺の行動に驚いたかは分からないが、少し間ができてしまった。しばらく沈黙が続いていたが、相手がため息をつき、「別に頭を下げなくていい、上げる。」といってきたので、俺は素直に頭を上げた。その瞬間俺は目を見開いていただろう、といっても過言ではないほど驚いた。それもそのはずだ、そこにいたのは今回の任務で初めて会った『将軍』だったからだ。驚いていて尚且つ口が聞けないという状態に陥っている俺と対称に『将軍』は、とにかく無表情だった。その表情を変えることなく、俺の

隣に並ぶような形で近寄って来た。

「おい、そこのお前、私に喧嘩を売っているのか？」

「え、売ってないですが・・・」

「お前ではない。そこにいる『化け物』の方だ。」

てっきり俺が怒られていたと思ったが、どうやら違ったようだった。という風に解釈している場合ではなかった。『將軍』は今確か、湖の方を指を指して『化け物』といった。もしかして…

- - - ギッシャアアッアアア!!

水しぶきを上げながら湖から出て来たのは、でかくてまさに『化け物』だった。しかもこいつには腕があつて、先程見つけた足跡にそっくりだった。というよりそのままだった。

勘弁してくれ、と思いつつ、こんな奴に食われて消化されて殺されるのは真つ平ごめんなので、剣を構えた。隣にいた『將軍』すでに構え、相手に切りかかっていた。流石は数多くの『將軍』の中で一番剣に長けていると言われている存在だ、化け物の皮膚を切り刻んでいた。

「その奴!!」

「っはい！何でしょうか!!」

「私を援護しろ、コイツを始末する。できるな!!」

「は、はい!!」

清々しいほどの返事をしたのはいいが、とても困った。援護なんてしなくても『將軍』だけで勝てそうだからだ。

やれやれ、本当に俺は運がないのか、自業自得なんだろうか。

出発

これはとある村での出来事。

「匂うぞ、これは災厄のものじゃ。」

「おお、誠にございますか。大婆様。」

「それは、不味いことになっているのでは・・・。」

1人の老女によって導き出された答えに人々は不安を見せていた。手を合わせてお祈りする者や既に泣き始めている子供をあやしている者もいる。そんな村の人々の様子に老女は少し呆れていた。これは何でも大げさすぎるではないか、と心の底で思ってしまった。

「安心せい、ここには番人がおるじゃろうに。」

「しかし、あやつは・・・」

「いいんじゃない。・・・して、ティエラ、よ。」

老女はそこに何かがいることが分かっているかのように村の奥にある暗闇に向かつて話し始めた。しかし、そこから返事は返ってこない。それでも老女は言葉を紡いで言った。

その様子は慣れているのか、村の人々は特に驚いている訳でもなく様子を伺っていた。

「おんし、災厄にあってみんか。面白いことになるぞ。」

影は、戸惑ったようにその形を歪めた。

＊

「手間をかけさせたな、助かったぞ。」

「い、いえ。俺は特に何もしてないです。」

だからいい加減、俺の腕を掴むのをやめてください、『將軍』さま。

俺は、心の中で思っていた。先程の巨大な湖の化け物は殆ど『將軍』に肩をつけられたとっていいほど、討伐された。俺も少し援護したのだが、はつきりいつていらなかったと思われるのは、俺だけではない。討伐し終わったため、すぐに任務に戻ろうとしたのだが、何か気に食わなかったのかそれとも何かあったのか、『將軍』は俺の右腕を力強く握りしめた。女の方なのに随分とお力がお強いです

ね、と心の中で皮肉ったのは、秘密だ。こんなこといったら、何されるか分からないから。

そんなことをしていると、森の方から何やら聞こえてよく聞いていると、『將軍』を呼ぶ声だ。焼き落ちた木々の間から出てきたのは、今回補佐として来ていたサクリファイス准将だった。その様子は酷く慌てており、少なくとも補佐には似つかわしいような気がした。サクリファイス准将はどちらかといえば、戦略を立てる方。『参報』のようなタイプだ。それに加えて准将はいわゆる『七光り』だった。准将の父親は確か、元將軍。その父親から今の地位にありつけたという話だからもつと笑える。帝国は軍事国家だというのに聖王国のような貴族の生活をしているのだ。そのため見た目は只の小太りのおっさんだ。だから俺の隊長もいつていたが、あんな人で大丈夫なのか、と愚痴を零していたのを聞いた。そんな俺の心境と同じなのか、『將軍』も何だか煩わしいものを見るような蔑むような眼差しを准将に向けていた。

「どうした、准将。何か不備もあつたか？」

「不備どころではありません、將軍！！こんなところで油を売っている場合ではありません！！例の『召喚獣』がこの森から逃げ出したのですよ！？」

「ほう、それは貴公にまかせたではないか。お前は私におまかせを、奴の首を一捻りしてまいります。といったのはどのどいつだ？」

「し、しかしそれとこれ「黙れ。」

弁解をしようとした准将に冷たい、冷水のような言葉を『將軍』は降り注いだ。俺は『將軍』の後姿しか見ていないが、前にいる准将の顔を見る限り見ない方が得策だと思った。俺は先程その様子を間近で見で、行動した。恐ろしさを十分に感じている。

『將軍』は掴んでいた俺の右腕から手を離し、准将の方へ近づいて行った。准将の方は何もするわけでもなく、腰が抜けたのかその場に座り込み、ただ怯えて『將軍』を下から見上げていた。何だかその様子が、よく昔話にあるようなものにある場面に見えるのは、俺だけではないはずだ。こんな緊張する場面で笑いそうになっているのなんて、俺だけだな。そう思い、少し自嘲していた。そうこう俺が考えているうちに『將軍』は、准将の目の前に立っていた。相変わらず恐ろしいオーラを漂わせていた。

「それでどこに逃げて行っただ？」

「も、森の向こう側です！！すぐに追いかければ・・・」

「お前はここで腰を向かしているから私が変わりに追いかけると？笑わせるな。貴様の失態だ。貴様がいけ。」

「しかし、相手は大佐クラスを殺しているのですよ！？返り討ちにあうのが、目に分かります！！」

「おや、お前は准将ではなかったか？どうとでもなるだろう、行け。」

「です「黙れ、痴れ者が。」・・・っ！！」

「貴様、上官命令違反だ。即刻、補佐を解任する。」

「なっ・・・!!!!」

「変わりといっでは何だか、」

ちよ、何だ。『將軍』さま、何で俺を見るんですか。

今まで劇的な有様をただ傍観者としてみていたのだが、何だか雲行きが怪しくなってきた。不味い、今更出世街道なんて昇りたくないです、止めてください。上官に准将が逆らった地点では、まあ仕方がないなと思っていたが、その後の『將軍』の行動が非常に不味いと思われる。

俺にすつごく視線を向けて来る2人。1つは、嫉妬のような業火に焼き殺されそうな視線だ、非常に有難くない。そして、もう1つは・
・

「三等兵、貴様が変わりに補佐しろ。この私
ユ・ペネット』のな。」 トリッシ

「えっ……………」

俺はこの時相当なマヌケ顔だったことを直感というよりも確信して
しまった。

……………やっぱり俺、自業自得なのか？

＊

サラは現状に困っていた森を向けて危機を脱することが出来た。しかし、これからが問題だった。いくら逃げ切ったとはいえ、まだ森の中には火を放った連中がわんさか居るはずだ。そして、この森の奥までやってきている奴もいるかもしれない。簡単にはいかないだろう。どうしたものかと考える。それに加えて、若い二人も様子がおかしい。……何だ、この頭が痛くなる状況は。

ルナは様子が変だ。何かあったのか、と疑うくらいにだ。シノンは……言うまでもなく、ここに来たときに連中と何かがあったのだろう。奴らが身につけていたのは、対召喚獣用の、しかもシノンに効くものばかりだった。狩りに来られていたな、これは。

相変わらず悪趣味な連中だな、と思った。そんなことは変わる訳ないか、と考えを終わらせたサラは何時までも此処にいるわけにはいかないと思い、顔を伏せているルナとその傍にいるシノンに近づいた。

とりあえず移動するぞ、と二人声をかけ、サラは荷物を背負った。ルナは立ち上がる元気もないようで、シノンに支えられながら、漸く立った。サラはそんな様子にため気を尽きなくなつて気だが、いきなり故郷を奪われたものだからな、と思った後、随分自分自身が

あまり傷ついていないことに笑ってしまった。

（奪われる事も慣れたってことか、）

随分薄情になってしまったな、と感じながら、2人を見た後に先頭で歩き出した。

森の反対側に出たことはなかったが、少なくとも3つの集落があることを覚えている。しかし、昔の話なので今も現存しているかということは定かではない。宛もなく歩くよりはまだいいかと思いながら、サラは歩いた。

「サラ、どこに向かってるんだ？」

「反対側にはあまり来たことはないんだが、少なくとも3つの集落があったのを覚えている。その1つ向かってる。」

「追っ手がすぐ来るんじゃないか？……奴らだってそれぐらい把握してるはずだ。」

「そうだろうな。でも安心しろ、その集落は少しの間なら安全さ。」

「……………“何か”いるのか？」

「小さな番人」さんが、いるだけさ。」

召喚師と異界の王？

あれから2人は誓約を結びました。

召喚師の青年は、王と共に魔王の手下たちを倒していきました。

2人の活躍に人々は、英雄だと褒め称えました。

そのことを耳にした者たちの中には2人の仲間になっていく者が出てきました。

それから、数多くの仲間たちが増えていきました。

2人は、仲間たちと助け合いながら、魔王の手下たちを益々倒していきました。

一方、魔王の方はこの様子にただ笑っているだけでした。

笑い声が魔王の城に響き渡り、不気味さを増していました。

しかし、この有り様に何時までも暢気になっている場合ではない、と思った魔王は、ある一つの国を報復として襲いました。

その国は、一晩にして滅びてしまいました。

そのことにより、人々は魔王に対して再び恐怖を覚え、青年と仲間たちを追い払ってしまいました。

青年は、その様子に臆することはありませんでした。

何と滅びた国にいた魔王たちを王と共に戦いに行つたのです。

そして、ついに魔王たちを追い払うことができました。

再び、平和を取り戻した国には民はおらず、いたのは1人の美しい姫でした。

青年は一目でその美しい姫に恋に落ちました。

その美しい姫の名は

麗しの貴婦人

「……………これは、…?」

「……………さま、それはアンモビウムという花でございます。」

大きな城、孤高に聳えている頑丈な城壁、華やかな庭、そんな中に
『わたくし』はいた。

『わたくし』は、いつも夢でこの光景を何度も見ていた。『わたくし』は、ある姫様に仕えているようで、何度も姫様の疑問にお答えしていた。姫様、といっても顔を見たことが一切なく、それに加え、ここでの『わたくし』の名前も違うようで、何かに遮られるかのようについていつも名前を聞きとることができない。何もわからない状態ですが、それでも姫様がとても美しい方だと、『わたくし』は心の底から思った。

前は、空の色、この前は海のことと姫様は全くと云っていいほど、外について何も知らなかった。

ここの王様は過保護なのかしら、と疑問に感じたが、『わたくし』はここ以外の場面は見たことがないから何も言えなかった。

そして、今回へと至る。今回は、庭先に咲いている花に興味をそそられたご様子だった。

姫様は『わたくし』が答えた花の名前を何度も繰り返して言っていた。

「……………このアンモビウムの花言葉は何というの?」

「……『不変の誓い』といった花言葉がございます。」

「『不変の誓い』……」

姫様は花言葉を何度も呟いていた。何か変な事でも言ったかしら、と『わたくし』は首を傾げながら思ったが、姫様は特に気にされた様子もなく、ただ呟いているだけだった。しかし、それを長い間……といっても数分間だけです。そうなさってらっしゃると段々困ってきました。呟いている姫様をどうしようかと思いましたが、そんな『わたくし』の苦悩を知ってか知らずか、姫様はいきなりこちらをお向きになられました。その行動に驚いていた『わたくし』に益々近づいて来る姫様。いつもよりも距離が短いのにそれでも姫様のお顔は見る事ができない。何かに、阻まれているような気がして……

考え事をしているせいか、姫様の言葉が聞こえない……？おかしい、それでも話は聞けるはずだ。

『何』か……いる？

「残念。もうすこしだったのに。」

「っ!!!?!」

女の声が聞こえた。それは目の前にいる姫様の声ではない。女は笑っている、あざ笑っている。

笑い声と共に『わたくし』は目が覚めた。

「……さま……ネーヴェ様!!」

「・・・っう・・・？ア・・・ウルム？」

「はい、大丈夫ですか？随分と魔されていましたよ。」

「ええ・・・大丈夫。」

「・・・やはり、例の『夢』ですか？」

「・・・・・・」

そう、私はあの『夢』を見てから何かが変わった。

私は、もともと聖王都の下級貴族の末子だった。あくまでそれは8歳のときのこと。

最初はただの夢だった。御伽噺の延長戦だと思っていた、友達に話して楽しそうにしていた。両親にも話した。お母様もお父様も笑って下さった、面白い話だと。しかし、その場に居たお祖父様は違っていた。お祖父様は・・・いえ、あの男はすぐにそれを知り合いの歴史家に話したらしい。そして、話を聞いた歴史家は興奮しながら、私の家へやって来た。そして、目を輝して話し始めた。

「君は、もしかしたら例の『姫』に仕えていた天使の生まれ変わりかもしれない！！」

興奮した歴史家は私の肩を掴みながら、「続きを話してくれないか！？もしかしたら、何か分かるかもしれない、あの『暗黒期』について！！」といった。

『暗黒期』 それは御伽噺の召喚師と異世界の王様の話にあつた言葉だ。人間が弱く、魔王たちによって奴隷にされていた時のことを指している。事実だったらしいが、その召喚師と王様をその後に見た者はないに等しく、存在を今は疑われている。彼が言っている『姫』というのは、その話に登場する人物なのか、と思った。それなら1人しかないない。『姫』の名は……………

「『プラエテリウム』……世界から何一つ残さずに消えた姫君。

」

何一つ残っていないのだ、彼女は。彼女の出身である国のこともその素性も何もかも残っていない。しかし、御伽噺だけに出て来る。召喚師が愛した女として。

御伽噺には彼女には仕えていた天使がいたらしい。人間が弱かったという時代には、珍しい光景だったはずだ。その天使は彼女が死ぬまで仕えていたという話だった。でも、安易に考えすぎではないかと歴史家を見た。相変わらず歴史家の男……ええい、長つたらしいわ。男は、キラキラ瞳を輝かせながら見ている。いやらしい目つきだわ、虫唾が走ってしまうわ。

それからだった、私の屋敷に数多くの歴史家たちが訪れ、私を『麗しの貴婦人』と呼び始めた。この呼び名はその天使がそう呼ばれていたという理由だけでつけられたもの。……嫌味つたらしい、馬鹿にしてるわ。そして同時に毎日監視されるようになった。

友人たちと遊ぶときも学業に励んでいるときも、屋敷の庭で午後のお茶をしているときもだ。うんざりだった。しまいには、聖王国きつての歴史好きとうたわられている屁理屈王子に捕まったのが、運のつきだったわ、本当に。

「急ぎましょう、ネーヴェ様。『例』の村はこの先です。」

「そうですね。追っ手が来る前に行かないと、あの馬鹿王子と結婚させられてしまうわ。」

それだけは、断固拒否したい。勘弁して欲しいわ。
私が、旅に出ている理由？もう、わかるでしょう。

結婚なんて人生の墓場でしかないのよ、私にとって。

『麗しの貴婦人』？

虫唾が走るわ、所詮みんな天使のことしかいってないじゃない。

私は、『ネーヴェエ』でしかないのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9267/>

約束と滅びの予言

2011年2月22日07時04分発行